

急速に巨大化した毛細血管拡張性肉芽腫の2例

菅原良徳, 藤山忠昭, 長沼 廣*

はじめに

毛細血管拡張性肉芽腫は日常の診療において、しばしば遭遇する疾患の1つであるが、そのほとんどは大豆大までの大きさである。今回、我々は急速に巨大化した2症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

症 例

症例1: 36歳 男性

初診: 平成11年9月13日

主訴: 後頭部の腫瘍

既往歴: 外傷の既往なし。

現病歴: 初診の2ヶ月前より後頭部に痂皮様の皮疹が出現し、急速に増大してきた。

現症: 後頭部正中に約27mm大の有茎性暗紅色腫瘍を認める。表面は凹凸があり、一部はびらんを形成し、易出血性である。(図1)

治療: 全摘術を行った。

病理組織学的所見: 拡張した毛細血管の増生と血管腫様の血管拡張がみられ(図2), 毛細血管間



図1. 症例1の初診時臨床像

の比較的幅の広い線維性間質増生を伴う(図3)。

症例2: 74歳 女性

初診: 平成11年9月22日

主訴: 左示指の紅色結節

既往歴: 外傷の既往なし。

現病歴: 初診の1ヶ月前より左示指腹部に血豆様の皮疹が出現し、急速に増大してきた。

現症: 左示指腹中節部に12×15mm大の肉芽腫様紅色結節を認める。(図4)

治療: 全摘後、全層植皮術を行った。

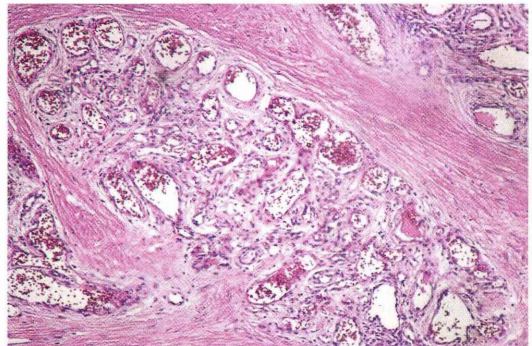


図2. 症例1の病理所見(H-E)
拡張した毛細血管の増生がみられ、血管腫様の血管増生も見る。

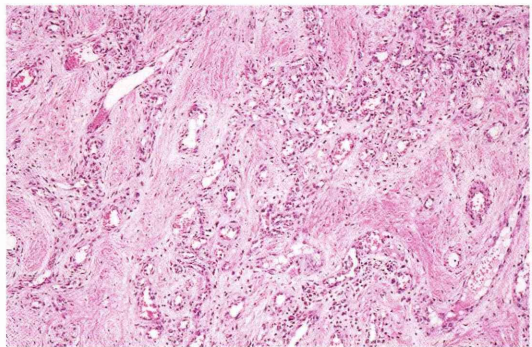


図3. 毛細血管間の線維性間質増生が目立つ。

仙台市立病院皮膚科

* 同 病理科

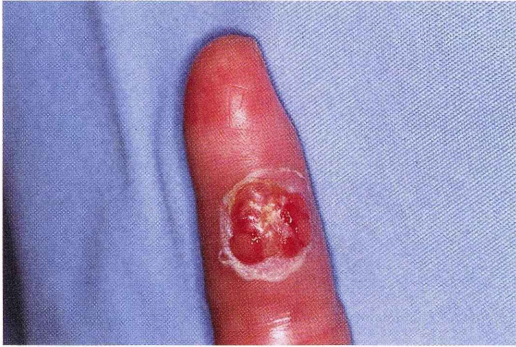


図4. 症例2の初診時臨床像

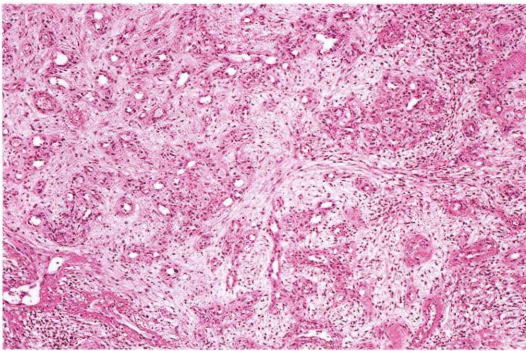


図5. 症例2の病理所見 (H-E)
 拡張した毛細血管の増生がみられ、線維芽細胞と浮腫を伴う間質増生を認める。

病理組織学的所見：拡張した毛細血管の増生がみられ、症例1より線維性間質は少ないが線維芽細胞の増生、浮腫を見る間質を認める (図5)

考 察

毛細血管拡張性肉芽腫は同義語として化膿性肉芽腫、ポトリオミコーゼ等とも呼称され、以前は感染性の肉芽腫であると考えられていた。今日では組織学的に蕁状血管腫に類似するため、遅発性の血管腫であるとの考えもあり¹⁾、さらに外傷等により誘発される血管の過形成であるという説²⁾もある。

本症は、短期間に一定の大きさ、そのほとんどは大豆大まで増大する単発易出血性の暗紅色結節で、手指、顔面および口腔内に好発¹⁾する場合が多いとされる。今回、我々が経験した2症例は急速

に巨大化した点が通常みられる本症とは異なる臨床経過をたどった。

病理組織学的には拡張した毛細血管の増生とその周囲の間質増生が特徴的で症例1では蕁状血管腫様の血管拡張を示した。これらの所見から本症例経過中のある時点で何らかの血管増生因子が分泌され血管増生、間質増生が起こり、さらに線維化に伴って血流障害が生じ、その結果、うっ血、血管拡張が亢進して急速に増大したことが推測される。

このような本腫瘍の増殖因子については従来より外傷に伴う刺激や、妊娠に伴う性ホルモンの関与も考えられていたが³⁾、近年、稲積ら⁴⁾は、外陰部悪性黒色腫の再発時に腹部に生じた5.5×4.8 cm大の巨大な本症の1例を報告し、悪性黒色腫が血管増生因子を産生し、このように増殖したのではないかと推測している。さらに shimizu ら⁵⁾は一酸化窒素合成酵素が毛細血管拡張性肉芽腫より検出されたことを報告している。一酸化窒素はフリーラジカルの1種で、その合成過程はマクロファージ由来の血管増生因子に関わっていると考えられているものであり、このように、近年は本症の病因として種々の血管増生因子が注目され始めている。

今回、我々が報告した2症例においては、何故、急速に増大したか、その成因となる背景の追究、解明は及ばなかったが、今後、本症の病因に関して血管増生因子を中心に更なる研究が待たれる。

ま と め

急速に巨大化した毛細血管拡張性肉芽腫の2例を報告した。急速に増大した原因として組織学的に何らかの血管増生因子の関与が推測されるが、成因となる背景の追究、解明は及ばなかった。

文 献

- 1) Lever WF: Granuloma Pyogenicum. Histopathology of the Skin 7th Ed, Lippincott, pp 695-697, 1989
- 2) Ackerman AB: Granuloma Pyogenicum. Histologic diagnosis of inflammatory skin dis-

- ease 2nd Ed, WILLIAMS & WILKINS, pp 861-863, 1997
- 3) 小谷宣丸: いわゆる Granuloma Pyogenicum. 皮膚科紀要 **63**: 31-47, 1968
 - 4) 稲積豊子 他: 巨大な臨床像を呈した Granuloma Pyogenicum の 1 例. 皮膚臨床 **34**: 656-657, 1992
 - 5) Shimizu K et al: Inducible nitric oxide synthase is expressed in granuloma pyogenicum. Br J Dermatol: **138**: 769-773, 1998